[成果情報名]イチゴ「ゆめのか」親株のジベレリン処理によるランナー発生促進方法
[要約]周年被覆雨よけ育苗におけるイチゴ品種「ゆめのか」親株へのランナー発生前のジベレリン製剤50ppmの茎葉散布は、ランナーの発生を促進し、採苗を早進できる。
[キーワード]イチゴ、ゆめのか、親株、ジベレリン処理
[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室
[代表連絡先]電話（代表）0957-26-3330
[区分]野菜
[分類]指導
[作成年度]2013 年度

[背景・ねらい]

イチゴ「ゆめのか」は、ランナーの発生時期が遅いことから採苗が遅れ、切り離し時期が梅雨期となり、炭疽病発生を助長することが懸念される。そこで、ランナー発生促進効果で農薬登録があるジベレリン製剤の「ゆめのか」に対する効果について検討する。

[成果の内容・特徴]

１．ジベレリン製剤50ppmを、親株が休眠明けした第１葉の展葉または展葉始期に株当り10ml茎葉散布することにより、ランナーの発生は早くなる（図１、写真１）。「ゆめのか」は、２次ランナー以降の発生が旺盛なことから、鉢受け作業を早進化することができる（表１）。

[成果の活用面・留意点]

１．周年ビニールを被覆した雨よけ高設育苗における試験結果である。非雨よけ育苗における処理効果については現在試験中である。
２．試験年は、親株の花房発生が多く、例年に比べランナーの発生本数が少なかった。
３．採苗数には、１次子苗以降の枝分かれしたランナー（「分枝ランナー」とする）から採苗した苗を含む。但し、径の太い、充実した分枝ランナーからのみ採苗した。
４．ジベレリン製剤は粉末を用い、霧吹きで散布した。
５．ジベレリン処理により茎葉も伸長するため、風による株の折損が懸念されることから、育苗床周囲への防風ネットの設置など風対策が必要である（写真２、３）。
６．ジベレリン製剤のイチゴのランナー発生促進を目的とした農薬登録内容は、使用濃度は 50ppm、使用液量は１株当り 10ml、使用時期はランナー発生直前～発生初期、使用方法は茎葉散布、総使用回数は１株当り１回である.

［具体的データ］

試験区の構成

区制	処理内容	処理日
（試験）ジベレリン処理	50ppmを10ml/株茎葉散布	2013年3月3日
（対照）無処理	―	―

耕種概要

1． 育苗様式　雨よけ、高設育苗

1． 供試株数　１プランター３株植え、１区４プランター12株

2． 親株定植　2012年11月７日

3． 親株施肥　2012年11月７日　IB化成S1号　5粒/株、2013年2月14日および4月23日　IB化成S1号　4粒/株

4． ランナー切り離し　2013年6月14日

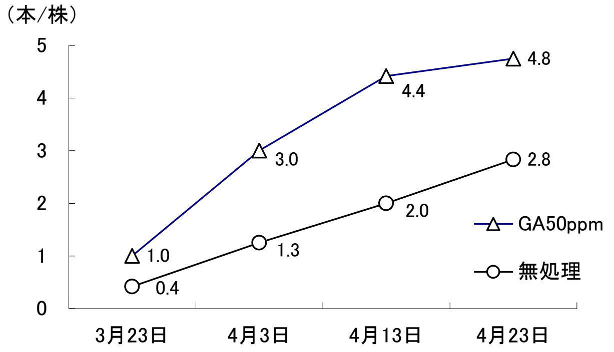

図１ 「ゆめのか」における親株ジベレリン処理とランナー発生本数（2013年）

表１ 親株へのジベレリン処理と親株１株当り鉢受け株数（2013年）

処理内容	5月23日	6月3日
GA50ppm	10.8	16.5
無処理	5.9	9.8

写真１　ジベレリン処理時の心葉

写真２　処理 10 日後

写真３　処理１ヶ月後

※写真２、３は、左から無処理、GA25ppm 処理、GA50ppm 処理

［その他］

研究課題名：イチゴ次期有望品種「ゆめのか」の安定生産技術の確立

予算区分　：県単

研究期間　：2013～2015 年度

研究担当者：野田和也